

# 日刊 動労千葉

86. 7. 17

No. 2296

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八 (動力車会館)  
(鉄電)二九三五・六 (公衆)〇四七二(22)七二〇七

## 国鉄分割・民営化は革マル・松崎(動労)を先兵とした マル生組合化・産業報国会化だ

政府支配者階級は以上のような攻撃を実現するために、積極的に彼らの手によって、同盟的な労働戦線の統一を促進させる(労働運動総体を右翼的に労使協調におとしこめる)策動を行っており、生運研攻撃もそのようなものとしてなされているということであった。首切りを含む10ヶ年計画実現のための攻撃であり、それは鉄労の拡大を窮極の目標とすることにより可能となると共に、労働戦線の右翼的再編策動と統一されるものであることを明らかにした。

生産性運動の基本は、「労使協議制」であり、組合が当局や資本家と一緒に企業  
の将来を考えるには、動力車や国労ではなく、御用組合たる鉄労の育成のみが考えられ 別の言葉を使えば、帝国主義に組み入れる労働運動づくりである。

70年代の反マル生闘争を我々(正統派動労)は、このような立場で闘ってきたのだ。

生運研加入者や、当局職制に同調する労働者は、「企業あつての労働者」「合理化は時代の流れ」という立場にたち、自己保身の道を、自ら選んだ人々だといえる。

### このマル生集団こそ動労革マル鉄

「合理化推進、組織破壊集団」をこのまま許すならば、その帰結は第2の「定員法」であり「産業報国会」の二の舞を踏むことは必至である。その時になってあわててもすでに遅いのである。その時には鉄労も、国労も、動力車もなく、当局のなすがままになるということである。

(1971年 動労本部発行パンフレット)  
【動労「生産性向上運動批判」より抜粋】  
マル生粉砕闘争で当局・鉄労・マル生分子と対決し、先輩が血と汗を流して築きあげたとき、動労が革マル・松崎によって破壊されようとしている。



ここまできたら合理化はどいふやる必要がある。国労が何んと言おうとやリゃあいいんだ。6.29国鉄マル生大会

連日、国鉄当局は新聞紙上でマル生グループの発足や、国労組合員の脱退などをきわめて策意的に報じさせている。千葉においては管理職の「拓創会」、非現業一般職員は「創葉会」なるマル生グループがデッチ上げられた。これらのマル生グループは口々に「国鉄の改革は一刻の猶予も許されない。我々は意識だけではなく血みどろになって改革に取り組み決意を表明する」などとまるで戦場にかりだされんばかりだ。このマル生分子たちは「先ずできることとして職場の草むしりをやった、次は公休を返上してオレンジカード販売を決めた」などと、「血みどろの決意」を得々と記事にしている。まさに「決意」記事の洪水の中で当局は、七月一日、「人材活用センター」

の設置を強行、組合役員・活動家を「余剰人員」として選別し職場から排除する攻撃を開始してきた。こんな理不尽な攻撃を許すなら労働者は分断・孤立させられ、当局のいいなりにやられてしまう。「国労解体」叫ぶマル生四組合  
国鉄労働者を虫ケラのごとく扱おうとしている中曾根・三塚・杉浦を、そして動労革マル・鉄労・真国労や、マル生分子をのさばらしておいていいのか。「国労組合員は路頭に迷わせる」という松崎のように首切りの先兵となって自分だけ助かるうなどということはどうして許せようか。  
松崎や動労革マルは希代まれな極悪分子で、マル生闘争のマル生分子・鉄労も足もとに及ばぬ極悪マル生分子だ。

「鉄労に学び、鉄労ととも歩む」... 鉄労大会で松崎挨拶  
国鉄当局は「新事業体」へむけて「合理化の強行」「強権的な労務管理」「組合脱退工作」など、動労千葉・国労つぶしの攻撃を動労・鉄労・全施労・真国労のマル生組合を手先きとしながら行ってきた。さきの動労、鉄労の全国大会で「分割・民営化賛成、国労を一挙に解体する」方針を総裁・杉浦同席のもとで決定した。分割・民営化攻撃の目的が国労つぶしだということがこれだけ鮮明となり、この攻撃が確実に目の前に迫ってきた今、これ以上じっとしていることは許されない。